文学的文章を学習材として捉える

国語教育講座・氏名　三浦和尚

１．授業の概要

この授業の位置づけは、国語科教育の基盤としての文章解釈力に見通しを立てるとともに、文学的文章を「学習材として捉え、分析する力を養うことである。これまで学生は、文学を楽しむ・学ぶという経験はしているが、それを教える視点から見た場合、従来の「作品解釈」とは異なる「学習者把握」に基づいた「学習材」としての分析が、国語学力観に基づいて行われなければならないことを自覚させたい。そのため、今年度は、高等学校の具体的な文学教材とその実践記録を通して、その目標の実現を図った。

講義を軸に授業を展開したが、具体的な作品分析においては、学生相互の関わり合いを大切にし、学習者の立場に立った相互批正を行うことで、学習材としての分析の視点を強化するよう心がけた。

具体的な実践記録として『高等学校国語科学習指導研究』をテキストとした。このテキストの使用は、今回初めてであり、今年度の第一の工夫点である。

前半は概論とし、作品分析の実際として、作家論的分析、作品論的分析、読者論的分析という方法を提示し、それらの方法の特徴と「学習材分析」との関連を明らかにした。また、

じゃんけんで負けて蛍に生まれたの　　池田澄子

春風や闘志いだきて丘に立つ　　高浜虚子

子を思ふ日ねもす捨菊見えてをり　石田波郷

の三句をもとに、学習材とは何か、学習材としての要件は何か、また、文学的学習材における作家の位置づけ等について考察した。

続いて、「羅生門」「蜜柑」「山月記」「セメント樽の中の手紙」等の高等学校文学学習材を取り上げ、作品解釈、学習材としての価値、学習目標の立て方等について考察した。

特に「蜜柑」においては、学生相互の読みあいを取り入れ、国語科学習指導において常に問題となる「多様な解釈」とその扱いについて理解を深めた。

まとめとして「文学的文章の文章分析」のあり方について講義した。

２．授業評価の方法

面談法と記述を中心としたアンケート法によった。全受講者数は 50 名である。

３．結果の概略と感想

昨年度は、グループによる話し合いを多く取り入れたため、講義は少なかったが、学生同士が自分たちで議論する場が増え、それは却って学生にとっては面白いものになったと思われた。しかしながら、時間的な制約から、どこまで実効性があるのかについてやや疑問があったので、今年度は、具体的な作品を提示しながら、実践記録に学ぶことで、学習材研究の実際に光を当てようと試みたものである。

「羅生門」「蜜柑」「山月記」など、すでに高校時代に学んだ学習材がどのように実践記録化されているのか、それが自身が学んだ記憶とどう違っているのか、そしてそういった授業のために教師はどのような思いをもち、どのような準備をして授業に臨んでいるのか、そういったことについては、具体的に感じることができたのではないかと思われる。そういう意味では、今回のテキストの使用については、一定の効果を認めることができる。

以下に、いくつかの学生の評価を挙げる。

A　授業の中では「作品」としてではなく、「教材」として物語を読むことが多かった。(中略)教員になったとき、このように作品を捉えることが必要であると改めて感じることができた。また、発問を考えることによって、自分が何を伝えたいのか、生徒に味わわせたいのはどのような部分かを突き詰めていくことが、予想以上に難しいことであると実感できた。普段の自分の読みだけでは、読み取れていなかった細かい部分があることも、友人との意見交換や課題の交換によって知ることができた。そして、先生の教師としての経験や、実際に生徒が書いた文章を通して、さまざまな考

えがあり、それをどのように教室でリードしていくかが重要であるとも感じることができた。

B　私は今まで自分の読みと先生の読みとの相違や合致が面白いと思って国語の授業に取り組んできた。しかし、この授業で、「友達に学ぶ意義」を考えさせられた。振り返ってみれば、中・高の時の国語班学習をよく覚えているし、授業後にあの話はどこがよかったとか、だれに共感したとかを友達と話して楽しんだ覚えがある。中学の時の国語が苦手で好きになれなかったのは、答えが一つに絞られないといけなかったからだ。高校で国語を好きになれたのは、(中略)国語を好きな友達の影響が大きい。言葉の持つ力や、読み手の経験や性質から、一人ひとり異なる文章の感じ方に面白みや魅力を感じられるようになった。「味読で自身を読む」と三浦先生が言われたことが強く印象に残っている。授業で学んだことは「国語の魅力を引き出すための読み方」である。

C　今まで授業の受け手としてしか国語を考えてこなかった私が、この講義をきっかけに、国語を教える側から考えるようになった。教師を目指すうえでこれはとても大きな起点であると思う。特に、作品の教材性についてはさまざまな視点から見ることができるようになったし、指導方法についても先生の経験から多くのものを得ることができた。しかし、講義の筋道が明確でなく、講義自体の目標を見失ってしまいそうなことが多くあったように思う。一斉学習がよいとはいわないが、もっと板書やレジュメのようなものがあったなら、よりよい学習が進められたかなと思う。

D　三浦先生の授業実践を聞き、先人の知恵を得られたことは大いに有意義だった。１回生の段階では授業実践や指導案について考える機会は本当に少なく、また観察実習以降具体的に授業を行っている場面などに触れる機会もなかったので、授業実践の記録に触れることで、自分ならどうしたいか、自分が生徒ならどう感じるのかなどを考える機会をこの講義を通して得られたと思う。ただもう少し受講生側に意見や感想を講義中に発表する機会を設けてもらえると、受講生全体の雰囲気として積極的になれたかもしれない。しかし先生のやり方・考え方に触れることができ、また先生の軽妙なトークもあってとても興味深い講義になったと思う。

４．今後の課題

学生の記述に表れているように、生まれて始めての「国語科教育」の授業としては、実践場面とつなぎながら、学生に無理のない学習を保障できたのではないかと思われる。また、１年生としての「国語科教育」に対するある程度の意識改革もできたのではないかと考えられる。

しかしながら、昨年あった次のような感想とは少し離れたものになっていったことも事実である。

・最後の教材研究の発表は、準備は大変でしたが、深く読むこともできたし、いろいろな人の読み方や感じ方、意見も聞くことができて、とても勉強になりました。

・今、自分が持っている知識や理解はまだまだ未熟で不十分なものだと痛感しました。

学生同士の交流は、そういう場面を作ったからこそ「もっと」という感想・批評が出ている側面もあるように思われるが、実際、講義場面ではひたすら話すという講義形態が多くあったのも事実である。

今後は、さらに、学生同士が関わり合い、読みあいながら、国語科学習指導の面白さ、難しさ、奥深さに目を開いていくことができるよう、工夫すべきであろう。そのためには、高校時代とのつながりを意識すること、学生の相互交流・相互評価の場面を増やすことが必要であるように思われる。

また、「講義の筋道が明確でない」といった反応には、改善の余地があろう。授業者として「明確でない」とは思っていないが、それが学生に理解されていないということであれば、テキスト以外にレジュメのようなものを作ったりするべきかもしれない。

但し、私自身は、学生の反応を見ながら授業内容を変えるという、授業本来の姿に近い方法をとったつもりであるので、その原則と「筋道を見せる」ということとの折り合いの付け方は、そう簡単なことではない。